

# 妊娠期における母子の接触としての胎動

## — 胎動日記における胎動を表すオノマトペの分析から —

岡本 依子<sup>a</sup> 菅野 幸恵<sup>b</sup> 東海林 麗香<sup>c</sup> 亀井 美弥子<sup>c</sup> 八木下 暁子<sup>d</sup>  
高橋 千枝<sup>e</sup> 青木 弥生<sup>f</sup> 川田 学<sup>g</sup> 石川 あゆち<sup>h</sup> 根ヶ山 光一<sup>i</sup>

<sup>a</sup>湘北短期大学保育学科 <sup>b</sup>青山女子短期大学児童教育学科 <sup>c</sup>東京都立大学大学院  
<sup>d</sup>神戸大学大学院 <sup>e</sup>青森中央短期大学保育学科(現, 鳥取大学) <sup>f</sup>松山東雲短期大学保育科  
<sup>g</sup>香川大学教育学部 <sup>h</sup>愛知県知多児童相談センター <sup>i</sup>早稲田大学人間科学学術院

### 【抄録】

妊婦が胎動をどのような感覚としてとらえているか。本研究では、胎動そのものの変化に対して、妊婦がどのような感受性を示すかを検討する。妊婦の胎動への感受性の指標として、妊娠中に記録された胎動日記において、胎動を表現するために用いられたオノマトペに着目した。妊婦 38 名から得られた胎動日記 1032 を分析した結果、妊娠期には、実にさまざまなオノマトペが用いられていることがわかった。オノマトペに用いる音が豊富であり、語基の変形だけでなく、臨時のオノマトペの使用も認められた。また、胎動を表すオノマトペと胎児への意味づけとの関連について週齢変化を検討した結果、3つの時期に整理することができた。第一期(～28週)は胎動のオノマトペが多様性を帯び、第三期(35～40週)に向けて、オノマトペの多様性より、胎児への意味づけの多様性が増すように変化することを見いだした。最後に、母子の身体接触としての胎動という観点から考察した。

### 【キーワード】

胎動 親としての発達 母子の接触 胎動日記 オノマトペ

### 【目的】

親子における接触の重要性は古くから認められており、あらゆる角度から接触の効果について、検証がなされている。日本の育児においても、伝統的にスキンシップを重視する傾向があったといえるだろう。ある程度の年齢に達した子どもに何

か問題があると感じたとき(指しゃぶりや夜尿、あるいは、非行などについても)、親や周囲の大人の「小さい頃のスキンシップが足らなかったのではないか」といった、スキンシップの不足(しかも幼少期の)と現前の問題を関連づけた言説に出会うことが少なくない。こういった言説が正しいかどうかということではなく、一般的には、スキンシップの重要性が当然のこととされ、育児のなかで重視されてきた表れといえるだろう。

もちろん、親子の接触の機会が減っているので

---

### <連絡先>

岡本 依子 yoriko@shohoku.ac.jp

はないかという意見もある。乳幼児を連れての外出に、ベビーカーが使われることが増え、車を運転する女性が増えたことから、母親の車使用も増えた。だっこやおんぶで肌を触れあわせて歩くという機会は、確かに減ったかもしれない。しかし、乳幼児の調査で家庭に訪問すると、「こうしていると泣きやむから」と、おんぶ紐で乳児を自分の背中に負い家事をこなす母親も、「子どもをずっとだっこしていたら、腱鞘炎になってしまった」と語る母親も少なくない。また、各地域でベビーマッサージの教室や講座が増え、参加者も多いという。現代の子育てにあった形で、接触のあり方が変容しているのかもしれない。

このように、少なくとも日本の育児において接触の重要性は疑いの余地のないものといえる。しかし一方で、接触の重要性が語られるのは、ほとんどが子どもの出生後のこととっていいだろう(低体重出生児などのカンガルーケアも出生後のことである)。本報告では、これまでほとんど議論されることのなかった妊娠期の接触について考えてみたい。

確かに、接触という皮膚を通じた感覚は、非接触から接触への変化に際して意識化されるものである。妊娠期については、子どもが母親の胎内にいる状態であり、非接触の状況が考えづらい。そのため、わざわざ妊娠期の親子の接触として取り上げる必要もなかったのだろう。あるいは、子どもの存在が胎内であるため、他者との接触の感覚というより、より自己身体の感覚に近いものとして感じられるため、接触として捉えづらいのかもしれない。そうだとすると、妊娠期の親子の接触は扱いはない問題といえるかもしれない。しかし、妊婦にとって、胎児との接触であると感じられることはないかという、そうではない。妊婦は、胎児の動きを身体的な感覚を通して感じることができる。

さらに、胎動による身体的な感覚は、妊婦が直接我が子を感じることでできる唯一の感覚でもある。近年、超音波検査(エコー検査)による診断が普及し、ほとんどの妊婦が、胎内にいる我が子の超音波映像を目にする機会をもつ。妊婦にとって、超音波映像は、胎内の我が子をイメージするきっかけとなったり(蘭, 1989)、妊婦の気持ちに(おもに、ポジティブな)影響を与えたり(三澤・片桐・小松・藤澤, 2004)する。しかし、我が子を直接見たり、わが子の声を直接聞いたり、我が子を直接抱いたりするのは、根本的に異なる体験といえるだろう。その意味でも、妊婦にとって胎動がどのような意味を持つ感覚であるかを検討する必要があるといえる。

ところで、胎動については、超音波検査装置を用いて胎児の動きが観察できるようになり、急速に研究が進んだ。多田(1992)によると、妊娠7週ごろから胎芽(胎児)のうごめくような蠕動運動が始まり、9週までに頭部、躯幹部、上下肢などが連続して動く集合運動、10週には体の位置や向きなどを同時に変化させる連合運動へと発達する。16週までに運動反射がほぼ完成し、32週以降は体全体として調和のとれた運動となる。そして、33週以降は、胎児が大きくなるため羊水腔が狭くなり、全身運動は活発でなくなる。また、観察時間中に胎動が生じる時間の割合については、妊娠初期には40%で、週齢が増すごとに増加し、妊娠中期に60~70%となり、妊娠末期に向けて漸減する(上妻ら,1983)。

上で述べたように、胎児自身はかなり早い時期から運動を始めるが、母親が胎動を感じることができるのは、妊娠16~20週頃である(間崎・平川,1998)。胎動を感じる時期については個人差が大きく、また、初産婦よりも経産婦の方がより早期に胎動を感じるといわれている(鈴木・久慈,1995)。妊婦にとっては、妊娠初期に赤ちゃん

の存在を信じるのが難しい (Lumley, 1982) だけでなく、胎動を感じ始めてからも、「赤ちゃん」が動いているという実感はほとんどない。蘭 (1989) も、はじめての胎動について、小さな生き物、腹部の小さなけいれん、あるいは、腸に空気が入ったような動きなどのように感じられ、「赤ちゃん」が動いていると感じられることはないと述べている。本研究における胎動日記においても、胎動の感じ始めについて「もしかしてと疑う程度の弱い小さな感触。虫とか、腸が一瞬ピクッと (16週)」と語られていた。

胎動に着目し、妊婦の心理的な変化を詳細に捉えようとする研究は、多くはない。しかし、妊娠期における妊婦の心理的变化の契機として、胎動をあげる研究はある (たとえば、Condon, 1985; 上妻・岡井・水野, 1983; 川井・大橋・野尻・恒次・庄司, 1990; 川井・庄司・恒次・二木, 1983, 本島, 2007 など)。胎動を初めて経験した後、妊婦の胎児への愛着が急激に増大すること (Condon, 1985)、胎動が妊娠期の母性的行動をもっとも触発していること (川井ら, 1990; 川井ら, 1983)、または、胎動によって、妊婦の気持ちをポジティブに維持されることを示している。

しかし、これらの研究は胎動の重要性を訴えているが、一方で、胎動が妊婦にとって、どのような意味をもっているか、さらに、妊娠期の間にそれがどのように変化するかを検討した研究は少ない。そこで、岡本・菅野・根ヶ山 (2003) は、妊婦が胎動について語ること (「足で蹴る」など胎児の身体の部位や、「赤ちゃんが喜んでいる」など胎児の内的状態など) を、胎児への意味づけと捉え直し、妊婦から見た母子関係の変化を検討した。妊婦が胎動について記した胎動日記を収集し分析した結果、2つのターニング・ポイントを見いだした。第1のターニング・ポイントは、妊娠29-30週であった。この時期、胎動を、胎児の足と捉えた

語りが増し、それまで胎動から、「モグラ」や「虫」といった人間以外のものを想起した記述が激減する。そして、妊婦がお腹の存在を「人間の赤ちゃん」として意味づけるようになることが示唆された。第2のターニング・ポイントは、妊娠33-34週で、胎児の足についての語りが一時的に減少する時期である。ここでは、胎児の母親に対する応答としての語りから、母親以外の夫の声や外の音に対する応答としての語りへと変化していた。このように、妊婦は、胎動の感じ始めには、自身の体を感じる感覚を胎児の動きと結びつけられず、「虫」や「腸」の動きとしてしか想起できなかったが、妊娠週齢が増すにつれて、胎動を胎児の動きや内的状態の表れとして意味づけるようになったのである。このような胎動の意味づけの変化は、まさに、出産に向けて、親としての発達のプロセスといえるだろう。

ところで、妊婦は、胎動という身体的感覚を「赤ちゃん」の動きと意味づけられるようになったのは、なぜだろう。医師から告げられた出産予定日を逆算しながら、いわゆる心の準備を行っているのだろうか。もちろん、妊婦にとって出産予定日は、強く意識されるものであり、胎児の意味づけに影響を与えるだろう。岡本ら (2003) においても、妊娠後期に、出産を目前に胎児を外の世界に措定するような語りもみられた。しかし、胎動そのものの変化なくしては、妊婦の胎児への意味づけの変化もないのではないだろうか。

そこで本研究では、妊婦が胎動をどのような感覚としてとらえているか。また、妊娠期を通して、胎動そのものの変化に対して、妊婦がどのような感受性を示すのかを検討する。妊婦が胎動そのものをどのように感じているかの指標として、胎動日記において用いられた胎動を表現するオノマトペに着目する。オノマトペとは、動物の鳴き声や人間の声を模写してつくられた擬声語、自然

界の物音を真似てつくられた擬音語、および、事物の状態・動作・痛み・感覚・人間の心理状態などを象徴的に表した擬態語の総称である(田守, 2002)。本研究における胎動日記から例を挙げると、「ものすごく強くドンドン!と蹴ってきた(20週)」の「ドンドン」や、「ごろんとお腹のなかででんぐり返しをしている(35週)」の「ごろん」のように、胎動そのものを象徴的に擬態した表現がオノマトペである。オノマトペは、簡潔な形式でありながら、物事を写實的にありありと細かく、主観的感覚を感情込めて言い表すことができるという特徴を持っている(青木, 2003)。妊婦は、胎動を感じたとき、それをどのような感覚として受け止め、どのようなオノマトペを使って日記に記したのだろうか。日記において妊婦が用いるオノマトペの変化を、胎動の感覚の変化として捉えられないだろうか。本研究では、胎動を表現するオノマトペを形態的側面から整理し、その週齢変化を検討する。また、岡本ら(2003)では、妊婦が胎動から、胎児の身体の部位(「足」や「手」など)、胎児の内的状態(「よろこんでいる」など)、胎児の性格、胎児の反応(「〇〇に反応して蹴った」など)などを想起し、胎児のイメージを確立するプロセスを示したが、今回はさらに、胎動の感覚が、このような胎児への意味づけの変化とどのように関連するかも検討したい。

## 【方法】

**胎動日記協力者** 東京近郊に在住する初産妊婦38名。妊婦の年齢は、出産時点で平均30.16歳(25-39歳)であった。このうち、出産時まで骨盤位(逆子)だったのは7名、また、生まれた子どもは、男児20名、女児18名であった、第一子が36名、第二子が2名であった。母親の最終学歴は、専門学校卒4名、高校卒6名、短大卒10名、大学・大学

院卒18名であった。妊娠期に中毒症や切迫流産、切迫早産などのトラブルがあったのは5名であった。協力者は、妊娠・出産を目的とした母親学級において募集を行い、それに応じたもの、および、研究者の知り合いや協力者の紹介などで募った。

**倫理的配慮** 倫理的配慮として、協力者には、研究の目的、内容、プライバシーの保護や嚴重なデータ管理について、また、研究への参加は協力者の自由意思に基づくものであり、理由に関わらず研究協力の中断ができることを説明した。その上で、承諾を得られた妊婦に胎動日誌を依頼した。

**胎動日記の構成** 胎動日記は胎動1回分について、自由記述形式で“胎動について”、“胎動が生じた状況”、および“その胎動に対して”の3つの領域に記録するものである。また、胎動日記には、記録日および時間、妊娠週齢を記入する欄をもうけた。

**手続き** 上記の妊婦に胎動日記の記載を依頼した。どの胎動について記録するかは、協力者に任せることとした。これは、1日に胎動を感じる回数が多くそのうち1回を指定することが困難であることと、妊婦の胎動への主観的な思いを積極的にとらえるためには胎動の選定も協力者に任せることがよいらろうと判断したことによる。ただし、協力者には1日1回程度を目安に記録するよう教示した。協力者38名から収集された日記は1032で、1名あたり平均27.16(range: 1-145)の胎動日記を記したことになる。日記の開始週は、平均29.95週(range: 16-37)で、終了週は平均37.13週(range: 19-40)であった。

**分析単位** 胎動日記は3つの領域から構成されるが、分析においてはこの3領域をとくに区別せず胎動1回分の記録を分析単位とした。

**期間** 1997年5月～2005年6月

**分析** 得られた1032の胎動日記をもとに、妊婦が感じる胎動の感覚の変化を検討する。胎動感覚



Table 1. 胎動を表現するオノマトペのカテゴリー

カテゴリ		定義	例	Figure 7での表記		
胎動を表現するオノマトペ	第一音	カ行	カ行・ガ行に属する音から始まるオノマトペ	「クルツと」「ゴリゴリ」など	カ	
		タ行	タ行・ダ行に属する音から始まるオノマトペ	「ツーツと」「ドンドン」など	タ	
		ハ行	ハ・バ・パ行に属する音から始まるオノマトペ	「ヒュルル」「バタバタ」など	ハ	
		マ行	マ行に属する音から始まるオノマトペ	「モニョモニョ」など	マ	
	語基の種類	清音	第一音が清音	「くねくね」「モコモコ」など	清音	
		濁音	第一音が濁音	「グイグイ」「ボコボコ」など	濁音	
		半濁音	第一音が半濁音	「ピクッ」「ボコボコ」など	半濁音	
		1モーラ	語基が1モーラ	「ムムムム」「ビューツと」など	1モーラ	
		2モーラ	語基が2モーラ	「グリッグリッ」「モソモソ」など	2モーラ	
		変形の種類	語基のみ	語基のみのオノマトペ	「グルグル」「ぐにゅ」など	語基のみ
			長音	語基に長音が付加されたオノマトペ	「ぐにゅー」「ぐー」など	長音
	撥音		語基に撥音が付加されたオノマトペ	「グルングルン」「コロン」など	撥音	
	促音		語基に促音が付加されたオノマトペ	「グルツと」「ヒクツヒクツ」など	促音	
	反復	リ	語基に「リ」が付加されたオノマトペ	「ぐるり」「ピクリ」など	リ	
1回		反復しないオノマトペ	「クルツと」など	1回		
2回		2回反復するオノマトペ	「クルクル」など	2回		
3回以上	3回以上の反復をするオノマトペ	「クルクルクルクル」など	3回以上			
胎児への意味づけ	胎児の身体部位	手	胎児の手という表現	「(赤ちゃんの)手」	手	
		足	胎児の足という表現	「(赤ちゃんの)足」	足	
		人間以外	胎児を人間以外で表現	「モグラ」「虫」など	人間以外	
	胎児の内的状態		胎児の気持ちや思考など内的状態の表現	「(赤ちゃんが)喜んでる」「いやがっている」など	内的状態	
	胎児の発話		胎児の発話としての表現	「そんなことじゃダメだぞー」と赤ちゃんに叱られた」など	発話	
	胎児の性格		胎児の性格についての表現	「あばれんぼう」「くいしんぼ」など	性格	
	胎児応答	母への応答	胎児が母親に反応したという表現	「声をかけたら返事をしたみたいにな…」など	応答母	
		他への応答	胎児が母親以外のものに反応したという表現	「主人(父)がおなかをさすつたら…」など	応答他	

の変化を表すものとして、本研究では、妊婦が胎動日記において、胎動の感覚を表現するために用いたオノマトペに着目する。どのような種類のオノマトペが用いられているかについて検討する。さらに、胎動を表現するオノマトペと、胎児への意味づけに関わる語りが、妊娠週齢とともに変化するかどうかを検討する。

分析1では、1032のすべての胎動日記を、Table 1.の「胎動を表現するオノマトペ」17カテゴリについてコーディングし、妊娠期間を通して、妊婦が胎動の感覚をどのようなオノマトペを用いて表現しているかを検討する。具体的には、胎動を表すオノマトペの第一音がどのような音か、清

音・濁音・半濁音の別、語基のモーラ数、語基の変形や反復はどうかについて割合を求めた。

分析2では、胎動を表すオノマトペと胎児への意味づけとの関連をみるため、分析1の17カテゴリへのコーディングに、Table 1.の「胎児への意味づけ」8カテゴリへのコーディングを加えた25カテゴリについて、2週齢ごとに集計し、双対尺度法を用いて検討した (SPSS ver.12)。

なお、本研究で用いたカテゴリのうち、「胎動を表現するオノマトペ」17カテゴリは、田守・スコウラップ (1999) および田守 (2002) のオノマトペの分類を参考に、音韻形態にもとづいて作成した。日本語オノマトペの音韻形態は、1モーラおよび

2モーラの語基をもつものに大別できる。モーラとは、音韻論上の単位で、一般的には、1モーラは1つの子音と1つの母音からなる。第一音がどのような音であるか、また、清音・濁音・半濁音のいずれであるかによって、オノマトペのニュアンスが異なってくる。さらに、これらの語基に、促音、撥音、長音、あるいは、「り」を伴って変化形としてのオノマトペや、反復形として用いることでも、ニュアンスが異なってくる。このような知見を考慮して、作成したものである。一方、Table 1.の「胎児への意味づけ」8カテゴリは、岡本ら（2003）において、特徴的で、かつ解釈可能であったカテゴリのみを抽出した。具体的には、胎児の身体の部位（「足」や「手」など）、胎児の内的状態（「よるこんでいる」など）、胎児の性格、胎児の反応（「〇〇に反応して蹴った」など）である。

【結果】

分析1

胎動を表現するオノマトペの概要 1032の胎動日記において、妊婦が用いた胎動を表現するオノマトペの総頻度は、687であった。妊娠週齢の浅い時期には、ほとんどすべての日記でオノマトペが用いられており、1回の記事において2種類以上のオノマトペが用いられることもあった。週齢が進むにつれ、オノマトペの使用が減り、出産直前には総日記数に対するオノマトペ使用の割合が、約50%となった（Figure 1）。

次に、胎動を表現するオノマトペについて、第一音、語基、変形、および、反復について妊娠期間を通しての特徴を検討した。第一音については、ハ行（「ぼんぼん」「ポコポコ」など）やカ行（「グ

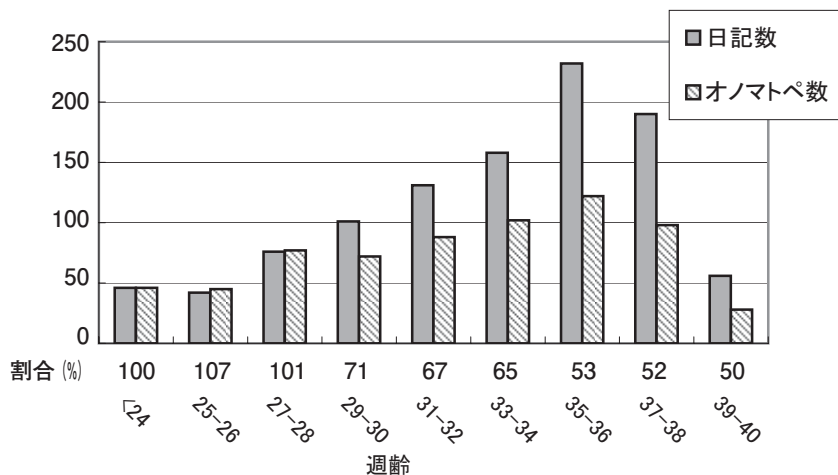


Figure 1. 週齢ごとの日記数とオノマトペ数

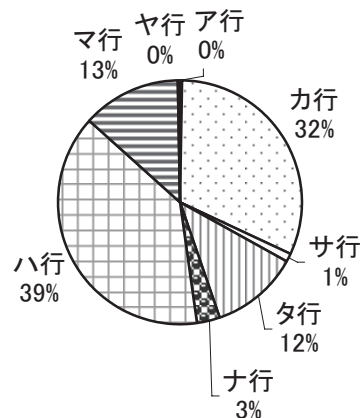


Figure 2. 胎動を表すオノマトペの第一音

ルグル」「コロ」などが多く用いられた (Figure 2)。一方で、32種類の音を使い分けていたことがわかった (Figure 3)。これらの多様なオノマトベのなかには、「グルグル」や「ポコポコ」のように慣習的なオノマトベの他に、「ビューッ (26週)」、「ぎくぎく (30週)」、「デロン (33週)」、「ボワ〜ンボワ〜ン (33週)」、「ウネウネ (35週)」、「クックッ (36週)」、「キュウキュウ (38週)」など、妊婦が創造したと思われる臨時のオノマトベも多くみられた。妊婦が胎動をさまざまな音で表現していたことや、現実の音や動作(本研究の場合、胎動の感覚)をできるだけありのままに近い形で表そうとする臨時のオノマトベ (田守, 2002) の使用は、妊婦が胎動の相違に対しそれだけ敏感であった (さらに言うなら、敏感であろうとした) ことの現れではないだろうか。

濁音 (「グルングルン」「ボコボコ」など) の使用が多いことも特徴的であった (Figure 4)。日本語オノマトベにおいて、清音に対し濁音の使用 (たとえば、「コロコロ」に対して「ゴロゴロ」) は、関わっている音や物が大きいこと、関わっている動作が活発であり、強い力が加えられていることを表すとされている (田守, 2002)。妊婦が、胎動の感覚の大きさや活発さ、力強さに注目しやすいことを表しているのかもしれない。

語基の反復については、連続した繰り返しの音や動作 語基のモーラ数については、1モーラ (「ドドド」など) 18.89%, 2モーラ (「グルグル」など) 81.11%であった。そもそも、日本語オノマトベにおいて1モーラを語基とするものは希である (田守ら, 1999) ので、そのためであると考えられる。

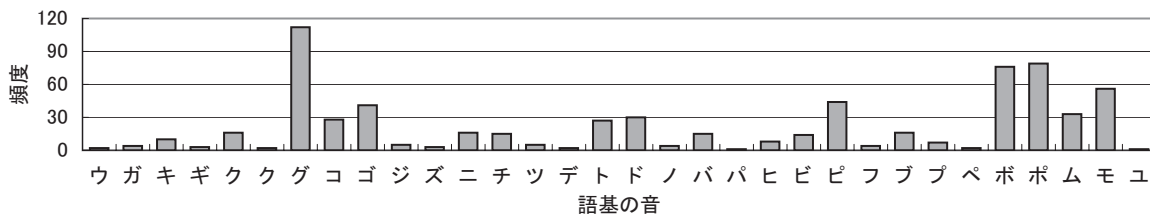


Figure 3. 胎動を表すオノマトベの第一音

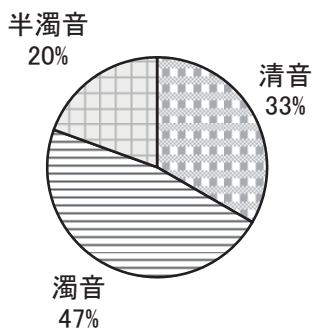


Figure 4. 胎動を表すオノマトベの第一音 (清音・濁音・半濁音)

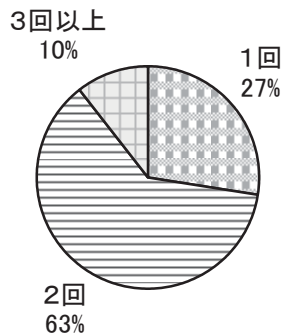


Figure 5. 語基の反復

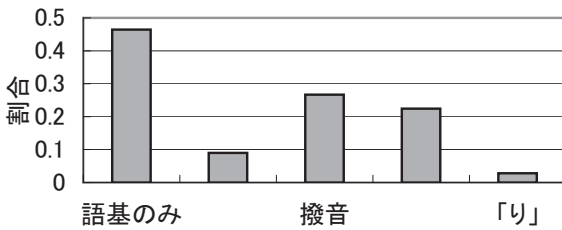


Figure 6. 語基のみと語基の変形

語基の反復については、反復しないオノマトペが27%、2回または3回以上の反復で表現されたものが、73%であった (Figure 5.)。オノマトペの反復は、関わる音や動作の連続や繰り返しを表すものとされている (田守, 2002) ので、妊婦が感じた胎動について単発的であったか、連続的であったかを表したものと考えられる。

語基の変形については、胎動を表すオノマトペにも、「ゴロゴロ」などの、語基のみ以外に、「ゴロゴロ」のような長音化、「ゴロンゴロン」のような撥音化、「ゴロゴロ」のような促音化、「ゴロリゴロリ」のような「り」の付加がみられた。妊娠期間を通しての割合は、Figure 6.の通りであるが、「共鳴」を表す撥音化と「瞬時性」を表す促音化が特徴的であったといえる。

## 分析 2

### 胎動を表現するオノマトペの週齢変化

Table 1.における胎動を表すオノマトペに関する17カテゴリと、胎動への意味づけに関する8カテゴリについてコーディングしたものを、2週齢ごとにまとめ、25カテゴリ (17カテゴリ + 8カテゴリ) × 9期間のマトリックスを作成し、双対尺度法を用いた (SPSS ver.12)。得られた結果を図化し、行列カテゴリを同時付置したものがFigure 7.である。

まず、オノマトペについて、語基の変形である「り」の布置が、次元1においても次元2において

も、大きくはずれ値となっている。ローデータを確認したところ、「り」を付加したオノマトペは頻度が全体的に低いものの、27-28週に増加するという特徴があった。27-28週の布置が、大きく次元2上、正方向へ偏っているのは、このカテゴリに起因しているものと考えられる。

次に、週齢の変化をみるために、図上に矢印を示した。矢印の向きが変わる時点を変化点と捉えると、～24週→25-26週→27-28週が次元2正方向への変化、29-30週→31-32週→33-34週が次元2負方向への変化、および、35-36週→37-38週→39-40週は互いに近く布置という、3つの時期に分けて考えることができるだろう。それぞれ、第一期、第二期、および、第三期とする。

第一期から第二期、第三期と、次元1上で正から負方向へ移行している。この週齢変化に沿って胎動のオノマトペに関するカテゴリをみると、第一音については「ハ行」→「カ行」・「タ行」→「マ行」と変化、および、「半濁音」→「濁音」・「清音」と変化 (濁音と清音は次元2上で変化がみられるが) している。変形の種類については、「促音」→「撥音」・「長音」と変化する。反復については、「1回」→「3回以上」→「2回」と変化する。

以上をまとめると、まず、週齢の浅い第一期 (～28週) には、他の時期に比べて、ハ行の半濁音の音で促音化した単発またはしばらく連続するオノマトペが特徴的であったことがわかる。これに該当する胎動を表すオノマトペを、日記から例を挙げると、「ピクッ (16週)」「ポンッ (20週)」、「ペコッ (26週)」,あるいは、「ポッコポッコポッコ (24週)」、「ピクッピクッピクッ (26週)」などがある。いずれのオノマトペも、小さく弱い動きや何か小さく沸いてくるような感覚を表すものといえるだろう。

つぎに、第二期 (29～34週) については、他の時期に比べて、カ行またはタ行で、濁音または清



妊娠期における母子の接触としての胎動

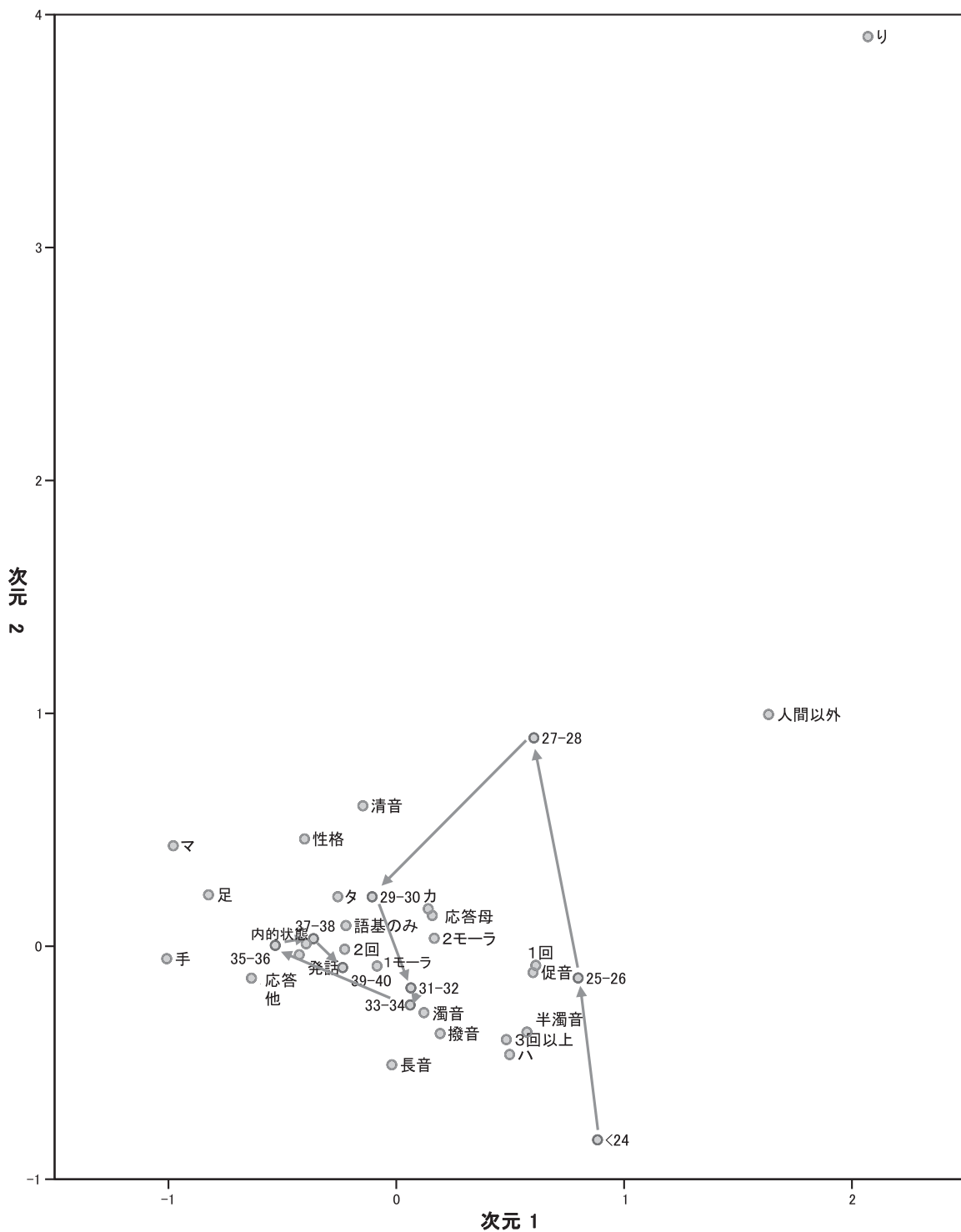


Figure 7. 胎動を表すオノマトペと胎動の意味づけ

音、語基のみまたは撥音化や長音化したオノマトベが特徴的であった。これに該当する胎動を表すオノマトベを、日記から例を挙げると、「ドカドカ(29週)」、「グリングリン(30週)」、「グイグイ(31週)」、「ギューギュー(31週)」、「グニユグニユ(32週)」、「チクチク(32週)」、「グルグル(32週)」、「クニョ〜ンクニョ〜ン(33週)」、「コリコリ(33週)」などがある。第一期に比べ、押される感覚や回転の動きを表したオノマトベが用いられ、動きに個性が帯びたといえるだろう。

第三期(35〜40週)については、マ行の音が胎動の感覚を表すために用いられている。日記から例を挙げると、「モゾモゾ(35週)」、「ムニユムニユ(36週)」、「モコモコ(36週)」、「モニョモニョ(36週)」、「ムズムズ(38週)」などがある。緩慢な動きや、ものが盛り上がりうごめいたりする様子を表すオノマトベが用いられている。お腹のなかで、胎児が大きくなり、動ける範囲が小さくなった状態での動きといえるだろう。

**胎動の意味づけとの関連** ここまで、第一期から第三期までの、胎動を表すオノマトベの特徴をみてきた。これらの胎動感覚の変化は、妊婦の胎児への意味づけとどのように関連するだろうか。

まず、胎児の身体の部位については、次元1正方向に大きく偏って、「モグラ」や「虫」を表す「人間以外」が布置し、負方向に「足」と「手」が布置している。次元1の正方向は、週齢の浅い時期の胎動オノマトベが布置していた。胎動が小さく弱い動きや何かが沸いてくるような感覚として感じられる時期には、妊婦は胎動を赤ちゃんという意味づけられず、「人間以外」と意味づけていることがわかる。

「胎児の内的状態」、「胎児の発話」、「胎児の性格」については、いずれも次元1負方向に偏っている。妊娠週齢を重ねながら、胎児の人らしい特徴を意味づけられるようになるのだろう。「胎児の応答」

については、第二期の周辺に「母への応答」が布置し、第三期周辺に「他への応答」が布置している。第一期に比べて、胎動の感覚が個性性を帯び、明確に感じられるようになると、妊婦はそれをまずは、自分への応答と意味づけ、さらに、緩慢な動きの感覚から胎児が大きくなっていることを感じると、出産を意識してか、胎児を外の世界へ意味づけるようになる(詳細な解釈については岡本ら(2003)を参照)。

また、妊娠期を通して、第一期は胎動のオノマトベが多様性を帯び、第三期に向けて、オノマトベの多様性より、胎児への意味づけの多様性が増す。妊婦は、胎動を感じ始めたころには胎動の感じ方の変化に敏感で、いろいろな表現のオノマトベを用いていたが、徐々に、胎動の感覚より胎児そのものへと関心が移り、胎児の身体や内的状態についてさまざまな意味づけを行うように変化したのだろう。

## 【考察】

本研究では、妊婦が胎動をどのような感覚としてとらえているか。また、妊娠期を通して、胎動そのものの変化に対して、妊婦がどのような感受性を示すのかを検討した。妊婦が胎動そのものをどのように感じているかの指標として、胎動日記において用いられた胎動を表現するオノマトベに着目し、オノマトベの第一音や清音・濁音の違い、語基の変形や反復などを吟味した。さらに、オノマトベとして表現された胎動の感覚と、胎児への意味づけの関連も検討した。

得られた1032の胎動日記を分析した結果、妊娠期には、実にさまざまなオノマトベが用いられていることがわかった。オノマトベに用いる音が豊富であり、語基の変形だけでなく、臨時のオノマトベの使用も認められた。また、胎動を表すオノ

マトペと胎児への意味づけとの関連について週齢変化を検討した結果、3つの時期に整理することができた。そして、第一期（～28週）は胎動のオノマトペが多様性を帯び、第三期（35～40週）に向けて、オノマトペの多様性より、胎児への意味づけの多様性が増すように変化することを見いだした。

妊婦が胎動日記において用いた胎動を表現するオノマトペが多様性に富んでいたのはなぜだろうか。胎動とは、多くの人にとって人生の一時期しか経験することがないものであり、胎動の感覚について語られる機会も限られている。したがって、胎動を表現しようとするとき、語彙としてある程度定着したオノマトペが数多くあったとは考えにくい。にもかかわらず、妊婦は多様なオノマトペを用いていた。これは、胎動への感受性の表れといえないだろうか。慣習的なオノマトペだけでなく、臨時のオノマトペも多く用いられていたことから、自分自身の腹部の感覚に意識を集中させ、できるだけ忠実に感覚を言語化しようとしたものと考えられる。臨時のオノマトペは、細やかな弁別性を求めて用いられる。既存の表現にはまりきらない感覚を、細かに弁別して、その動きを余すところなく感じ取ろうとする、妊婦の心理の表れといえるだろう。胎動日記においても「不思議な感覚」といった表現が複数の妊婦から見られた。オノマトペを創作しつつも、まだ表しきれない感覚なのかもしれない。妊娠期間、胎児が見えるわけでも、抱けるわけでもない。その分だけ、妊婦はより感覚をとぎすませて、胎動を積極的に感じ取ろうとしていたのだろう。妊婦の胎動への積極性の結果として、まだ見ることのできない胎児の大きさや動きの変化にも敏感であり、妊娠期を通して、胎動を表すオノマトペが変化したと考えられる。そして、胎動への敏感性から胎児への意味づけも変化したのではないだろうか。

つまり、胎動は、対人関係の基盤としての身体接触であるといえるだろう。妊娠期という我が子についての情報が限られている時期に、妊婦は、胎動を感じ、その胎動に意識を集中させながら、胎動を生じさせている胎児について想像をふくらませるのではないだろうか。そして、そのきっかけを作っているのは、胎児自身である。胎児が自分の身体を動かすことが、結果的に、妊婦に胎児の命の存在を伝えることとなっているのである。胎動は、胎児がただ動くということに意味があるのではない。胎児の動きに、妊婦が応じること、また、妊婦の声かけや妊婦の体勢の変化、外の音に胎児が反応して動くことといった原初的なやりとりを媒介しているものといえるだろう。

本研究では、胎動を表現するオノマトペについて、量的な分析から胎動のオノマトペを概観することを試みた。一方で、ひとりの妊婦がどのようにオノマトペを変化させるかなど質的な側面には言及できなかった。今後は、このような視点からも分析を進めていきたい。

## 【引用文献】

- 青木昭六 2003 日英語表現比較：宮沢賢治の作品に見られる小野目とペの英訳文に基づいて 愛知学院大学人間文化研究所紀要, 18,402-348.
- 蘭香代子 1989 母親モラトリアムの時代—21世紀女性におくる Co-セルフの世界 北大路書房
- Condon, J.T. 1985 The Parental-Foetal Relationship - a Comparison of Male and Female Expectant Parents Journal of Psychosomatic Obstetrics and Gynaecology, 24,313- 320.
- 上妻志郎・岡井崇・水野正彦 (1983) . 超音波断層法による胎児行動の解析. 周産期医学, 13,1897-1900.
- 間崎和男・平川舜 (1998) . 胎動が激しいがへその緒が巻いてしまわないでしょうか. 周産期医学, 28,186-188.

- 川井尚・大橋真理子・野尻恵・恒次鉄也・庄司順一  
1990 母親の子どもへの結びつきに関する縦  
断的研究—妊娠期から幼児初期まで— 発達の  
心理学と医学, 1 (1), pp.99-109.
- 川井尚・庄司順一・恒次鉄也・二木武 1983 妊婦  
と胎児の結びつき—SCT-PKSによる妊娠期の  
母子関係の研究— 周産期医学, 13,2141-2146.
- 木島優子 2007 妊娠期における母親の子ども表象  
とその発達の規定因及び帰結に関する文献展望  
京都大学大学院教育研究科紀要, 53,299-312.
- Lumley, J.M. 1982 Attitudes to the fetus among  
primigravidae Australian Paediatric Journal.
- 三澤寿美・片桐千鶴・小松良子・藤澤洋子 2004  
母性発達課題に関する研究(第2報)—妊娠期  
にあるはじめて子どもをもつ女性の気持ちに影  
響を及ぼす要因— 山形保健医療研究, 7,9-21.
- 岡本依子・菅野幸恵・根ヶ山光一 2003 胎動に対  
する語りにみられる妊娠期の主観的な母子関係  
母子関係:胎動日記における胎児への意味づけ,  
発達心理学研究, 14,64-76.
- 鈴木武徳・久慈直志 1995 妊娠から出産まで 有  
紀書房
- 多田裕 1992 胎児期の発達 in 高橋道子(編)  
新・児童心理学講座第2巻:胎児・乳児期の発達,  
pp.32-55 金子書房
- 田守育啓 2002 オノマトペ—擬音・擬態語を楽し  
む 岩波書店
- 田守育啓・ローレンス・スコウラップ 1999 オノ  
マトペ—形態と意味— くろしお出版

## 【謝辞】

本研究にあたって、お腹の赤ちゃんを心待ちに  
胎動日記を書き続けてくださったお母様方に心よ  
りお礼申し上げますとともに、お子さま方の健や  
かなご成長をお祈り申し上げます。

## 【付記】

本稿は、平成16-18年度科学研究費補助金(基盤  
研究(A)「対人関係の基盤としての「身体接触」  
に関する生涯発達行動学的検討」研究代表者:根ヶ  
山光一)の研究成果の一部である。

Fetal movement as physical touch between fetus and mother  
– Analysis of onomatopoeia which pregnant women used to express  
their baby’s movement. –

OKAMOTO Yoriko SUGANO Sachie SHOUJI Reika KAMEI Miyako YAGISHITA Akiko  
TAKAHASHI Chie AOKI Yayoi KAWATA Manabu ISHIKAWA Ayuchi NEGAYAMA Koichi

**【abstract】**

How sense does a pregnant woman have at fetal movement? The present study examined how pregnant women (N=38) described fetal movement in order to consider women’s perceptions of relationships with their fetuses. Especially, it focused on how onomatopoeia they use to express their sense at fetal movement. Participants kept a pregnancy diary about fetal movement. Analysis of the 1032 diary entries found out that pregnant women used very different kinds of idiomatic onomatopoeia, and also produced temporary onomatopoeia. Further, it also found out that in each of three periods (e.g., before 28<sup>th</sup> week, 29<sup>th</sup> – 34<sup>th</sup> week, and 35<sup>th</sup> – 40<sup>th</sup> week), pregnant women used different onomatopoeia for fetal movement. Finally, this paper discussed the meaning of the fetal movement as touch between fetus and mother.

**【key words】**

Fetal movement, Parental development, Mother-fetus touch, Maternal diary, Onomatopoeia



